

第十五章 灰燼十万卷

一 丸善飯店の火災

戦争後はかならず来る不況の波ものりこえて、日露戦争このかた上昇気運にのりつづけてきた丸善は、明治四十二年を迎え、比較的平穩無事にすぎたが年末にいたって、突如火災におそわれ、仕事の中心であった仮営業所が全焼して、ここに丸善の歴史は一新時期を劃するといつてよい。

十二月十日の払曉四時半、隣家の富田洋服店の三階の火のし場から火を發し、折からの北風にあふられて丸善の仮営業所に燃えうつって一なめにし、隣家の数軒もその猛火の犠牲となつて、朝方六時半にようやく消しとめた。

この夜丸善の宿直は三人いたがそろいもそろつてひどい近眼で、それが十人の寄宿の見習生を指揮してこの災厄に立ち向つたのだから、重要帳簿の一部をもち出すのがやつとのことと、近所の取引先きや出入の商人が、かいがいしく手つだつてはくれたものの、なにしろ火の足が早くて帳簿の大部分と商品全部が烏有に歸した。

「損害の見積りは建物が一万三千円、商品が十三万円以上に達した」

と「丸善社史」はかき「年末をひかえ相当大きな打撃だった」と付け加えている。しかし丸善の火災が、經濟的に計算できるだけの損害にとどまつたらうか。さいわいに内田魯庵の「灰燼十万卷（丸善炎上の記）」という一篇が

あり、つぶさに火事のおさまった朝の状況と、それで焼亡した図書について詳記して、それが文化的に如何にとりかえしのつかない損失であつたかを伝え、今日も読む者をして、痛惜の念に堪えざらしめる。(明治四十三年一月雑誌「趣味」に発表) その中という。

「眇たる丸善の店は焼けようと焼けまいと社会に何の影響も与えまいが、この中に充積する商品はみな日本の文明に寄与する糧であつた。戦争に勝つても日本の文明はまだ欧米とくらべものにならない今日、ラヂウムやエレクトロンや、プラグマチズムや將たイブセンやニイチュヤトルストイの思想が学者間の談柄にのみ限られてゐる今日、欧米首都のほかは地理的名称さえまだろくろく知られてゐない今日、自然主義を誨淫文学と見なし社会主義を売国論と敵視する今日、ロイテル電報よりも三面雑報の重大視せられる今日、滔々たる各方面の名士さえ学校時代の教科書たる論語とセルフ・ヘルプのほかには哲学も倫理もなきように思う今日、かくの如く人文程度の低い日本では、西欧知識の断片零緒もおすこぶる愛惜しなければならない。眇たる丸善の損害は何程でもなかるうが、その肆頭の書籍は世間の虚栄を増長せしめる錦繡綾羅と違って、みな有用なる知識の糧、靈魂の糧である。金に換えたら幾何のものだけでなく、その存在の効果は無際涯である。無尽蔵である」

「丸善社史」の筆者が、経済的に相当大きな打撃であると歎くのと反対に、魯庵はその方は大したことはないといひ、文化的損失の価値は無限大だといつて通歎する。これ或は第二次大戦々後の一部社風と、明治社風のちがひではないか。先人の自負するところまことに高いのに脱帽せざるを得ぬ。

魯庵の所記によると、焼失書籍は十万三千冊である。もちろん、その大部分は、再注文を発すれば、三か月もすると又着荷するが、再入手のまったく不可能に近い稀観書もすくなくあつた。中には売品とする意志がなく、只価値の高い珍籍であるため輸入したものもあつて、それは丸善の品位を高め、それを蒐集し、所持しているという事だけでも、人をしてそぞろに敬意を感じしめるものである。

魯庵の名篇「灰燼十万巻」の一節を転載して、その点をしのぼう。

二 「灰燼 十万巻」

（この節は「灰燼十万巻」の一節を縮約したのでこの編者の文章でないが、元の魯庵の文章のまとも、若干ちがう所があることを断っておく）

「焼跡の悲惨さはあだかも平家の栄華の末路を偲はせるような気がした。

『どうです、洋物部の損害は？』と、ちょうど居あわせた半分真っ黒けな顔をした主任にきくと

『全滅です』とさびし気に笑った。

ここを通つて新築の裏口から、まかない場にぬけ、焼けた材木をつたい、美術書のならんでいたあたりへゆくと、一列のフォリオ形の美術書が奇麗に頭をそろえて建てたようになり、真っ黒にそっくりそのまま原形をのこして焼けていた。

是等の美術書の大部分は巴黎の「リブレール・ド・ボザール」や「デューシェ」や独逸の「ヘスリング」か

ら此頃新着したばかりのもので、各種の図案粧飾、又は名画彫塑の複製帖等、何れも精巧鮮美、目も覚めるやうなものばかりであつた。其価を云へば廉なるも二十円三十円、高価なるは百五十円二百円といふものであつた。是れだけの図案美術書類は、今日の日本には普通の図書館は勿論美術専攻の如何なる研究所にさへ揃つてゐないと断言して宜からう。

ツイ此頃の新着だから、尚だ尽く目を通してゐなかつたが、デュボン・トールベルヴールの名物織物譜や、巴黎で新らしく出版された日本の織物帖、ビザンチンの美術大観、某々名家の蒐集した画牘等、その製版摺刷の精妙巧緻は今猶ほ眼底に残つて忘れられない。

其中には又クラインマンのアッシリア壁画の帖があつた、スタインの和蘭^{ゴッテン}発掘の報告があつた。前者はアッシリアの浮彫^{レリーフ}を撮影した全紙の玻璃版で、極めて緻密なる細部の雕刻までを鮮明に現はして殆んど実物を髣髴せしめた。後者は印度文明の揺籃地に関する最新の発見報告であつて、其発掘せる遺物の精巧なる写真数十葉は何れも皆東洋芸術の根本資料として最も貴重なるものである。

其中には又ヴワンダイクの著名なエッチングの複製画があつた。(価は四百円であつた。)英国印刷界を驚倒したメヂチ版の複製画があつた。ニコルソンの飄逸な筆に成つた現代文豪の肖像画等があつた。新らしいものではあるが、是等は大抵多数に頒つを目的としないで、三百乃至五百、中には僅に五十部乃至百部を限つた出版もあるゆゑ、其中には二度と再び得られないものもあつた。

ステュデオやアート・ジャーナルの増刊やマイステル・デア・ファーペや其他各種の美術書は凡そ一千部以

上も焼燼した。日本では欧羅巴に数千部を頒布する是等の普通の美術雑誌でさへも帳中の秘書として珍襲する美術家又は鑑賞家の甚だ少からぬを思ひ、更にこんな平凡普通なものをすら知らずに美術を談ずる者がヨリ一層少からざるを思ふと、恚んなものでも灰となつて了つたを亦頗る惜まざるを得ない。

余は屢々人に話した。倫敦タイムズ社が売つた数千部のブリタニカやセンチュリー大辞典はツンドク先生の客間や質屋の庫に埋もれて了つたと、賢しら顔して云ふ人もあるが、客間の粧飾となつてゐやうと質屋の庫に禁錮されてゐやうと、久しい間には誰かが読む、一人が読めば一人だけを益する。ツマリ数千部のブリタニカやセンチュリーが日本に広がつたはそれだけ日本の公衆の平均知識を増したわけである。

と心窃に感慨しつゝ、是等の大美術書を下駄で踏むのがアテナの神に對して濟まないやうな氣持がしながら左見右見してゐると、丸善第一のビブリオグラファーたるKが焼灰で真黒になつた草履穿きで煙の中を徜徉しつつ、焼けた材木や煉瓦をステッキで掘返しては失はれた稀觀書の行衛を尋ねてゐた。

『ドウダネ、掘出し物でもあるかね？』

『何にもありません。悉皆焼けて了ひました、』とKは力の抜けた声をして嘆息を吐いた。

『シーボルトは？』

『焼けて了ひました。』

シーボルトの名は日本の文明の起源に興味を持つものは皆知つてゐる筈である。葡萄牙のピントー以来日本に渡来した外人は数限りも無いが、真に學者として恥かしからぬ造詣を蓄へて、學術研究の真摯な目的を抱いて

渡来し、大にしては世界の学界に貢献し、小にしては日本の文明にも亦寄与したものはシーボルト一人であった。シーボルトが若し渡来しなかったら、日本の蘭学や本草学はアレ程に発達しなかったであらうし。又日本の動植物や特殊の文明も全然歐洲人に理解されてゐなかったであらう。其のシーボルトの『日本動植物譜』は特に我が文明の爲めに記念すべき書たるに留まらず、古今の博物書中の大著述の一つで、殊に日本に関する博物書としては今猶ほ權威を持つてゐる名著である。且初版以後一度も覆刻されなかった故、今日では貴重な稀覯書として珍重されて、倫敦時価一千円以上である。日本では、伊藤圭介翁の遺書が大学の書庫に収められてゐる筈であるが、其外に恐らく五部と無いものであらう。

此のシーボルトの『動植物譜』は先年倫敦の某稀覯書肆から買入れたのが丸善の誇りの一つであつたが、之が焼けて了つたのだ。

『片無しかネ?』

『片無しでもありません。今、其処で植物を發見しましたが、動物が見付かりません。』

と、Kがステッキで指さすを見ると、革の表紙が取れて、タイトル・ページが泥塗れになつたシーボルトが無残に黒い灰の上に横たはつてゐた。が、断片零紙も惜むべき此種の名著は、縱令若干の焼け損じがあつても、一部のフロラが略ぼ揃へる事が出来たなら猶ほ大に貴重するに足る。之を尽く灰として了はなかつたは有繋さすがの悪魔の猛火も名著を滅ぼすを惜んだのであらう。

『リンスホーテンもこんなになつて了ひました。』とKは懷ろからバラ／＼になつた焼焦だらけの紙片を出

して見せ、『落ちてたのを之だけ拾って来ました。』

リンスホーテンの『東印度旅行記』——原名を“*Navigatio ac itinerarium*”と云ひ、一五九九年ヘーグの出版である。此の貴重なる初版が日本の図書館に有る乎無い乎は疑問である。

『ジェシュイットの書翰集は？』

『あれは無論駄目です。あの棚のものは悉皆焼けて了ひました。』

此書翰集こそ真に惜むべき貴重書であった。原名を“*Cartas que los padres y hermanos de la Compania de Jesus, que andan en los Reynos de Japon*”と云ひ、日本に在留したザビエル初めアルメイダ、フェルナンデス、アコスタ等ジェシュイット派の僧侶が本国に寄せた天文十八年（ジェシュイット派が初めて渡来した年）から元龜二年（南蛮寺創設後三年）までの通信八十八通を集めたもので、一五七五年即ち天正三年アルカラ（西班牙）の出版である。殊に此書は欧羅巴刊行の書籍中漢字を組入れた嚆矢としてビブリオフィールに頗る珍重される稀観書である。

帝国大学の図書館で第一の稀観書として珍重するは所謂“*Jesuit press*”と称する是等のバテレンが本国へ送った通信であつて、蒐集の量も又決して少く無いから、或は此書翰集も大学に収蔵されてるかも知れないが、大学を外にしては日本では他の図書館或は蒐集家の文庫に此稀観書を発見し得る乎どう乎、頗る掛念である。

稀観書といふでは無いが、ベンガルの亜細亜協会の雑誌（一八三二年創刊？）の第一号から一九〇五年分までが揃つてゐた。亜細亜協会は東洋各地に設立されてるが、就中ベンガルは最も古い創立で、他の亜細亜協会

の雑誌よりもヨリ多く重要な論文に富み、東洋殊に印度学の研究の大宝庫として貴重されてをる。其価は金一千二百円で、雑誌としては甚だ不廉のやうであるが、七十四年間の雑誌を揃へるは頗る至難であつて、仮令二千円三千円を出した処で今日直ちに揃へ得られるものではない。」(内田魯庵)

もし付説して、前記の諸書を歴史的稀観価値によって順序づけるならば、一五七五年アルカラ出版のジェシユットの書翰集が第一であろう。ジェシユットは今普通にゼスイットと書き、音によって古くから耶蘇会の字を宛てる。今はこの類書のカルタス(表題は少しづつ違いがある)は「イエズス会日本年報」上下二巻、「イエズス会日本通信」上下二巻(いずれも村上直次郎訳・柳谷武夫編集)で、新異国叢書におさまっているが、それはいずれもポルトガルのエボラ出版の原本であるから、これはそれらとは違ふ原文でなくてはならない。

次にくるのがリンスホーテンで、魯庵の説明は簡に失して、その書への興味をひくに不足だと思ふが、著者はオランダ人でポルトガルの船にのつて東洋に航海し、一五八四年(天正十二年)日本近海を探險し、帰国ののちこの書を著わして日本の事情を伝えたので、これがオランダ人を刺戟して、他日日本との交渉のひらけてくる遠因となつた。のちに東洋文庫に入った本書を見ると、一五九六年アムステルダム出版とあつて、ヘーグ出版のこの丸善所蔵版より三年古いから、これは再版であろう。しかし東洋文庫はモリソン文庫を基礎として、東洋文献では世界一をほこる豪華さだが、その開設は大正十三年である。それに先んずること少くとも十五、六年前に、一商估の丸善が、商品とするあてもなく、こういう稀書を所蔵していたのは奇特と称してよい。

シーボルトはその「日本」の複製が「学鑑」誌上でも大々的に喧伝せられているが、焼失したのは「日本動物

譜」と「日本植物譜」で、その稀観価値は魯庵のさきに説くが如くである。じつは丸善の一〇〇年記念として、内々シーボルトの「日本」の再版の複製をしようかとの案もあったが、中にある着色図版の再製が容易でないために見送りとなった。「日本」でさえもそうなのだから、この「動植物譜」は一その至難で、両書とも戦前レプリントされたことがあったが、今後の重刊は不可能に近いから、焼失したのが痛惜せられる。

なお魯庵はステュディオやアートジャーナルその他の美術書一千部以上の焼失を語って、美術への関心を示しているが、江戸うまれの彼にはモダン・ボーイのようなハイカラ好みがあり、絵画も彫刻も音楽も非常に好きであった。特に絵画には嗜好が深かったのは、息子の内田巖が著名な画家となったのを見てわかる。そんなわけで彼が「学鑑」の編集を担当するようになると、美術書の移入が目に見えて殖え、誌上の広告面でも「のさばり」だした観がある。これがやがて「白樺」同人の足を丸善に繁くする遠因となる。

三 歴史家の世界歴史

歳末にせまうての火災がなかったら、この年（明治四十二年）は丸善百年史中の、あるいは最も安穏平凡な年と云えたかも知れない。

年頭早々、「歴史家の世界歴史」(The Historian's History of the World)の宣伝に大わらわなるを見る。これもブリタニカと同じくタイムス社出版の大叢書で、横浜のタイムス支社が丸善と共同して販売にあたったもので、両社が努力をかたむけたこと、やっぱりブリタニカ以上であろう。これは一、二年前から広告にかかっていたが、

THE HISTORIAN'S

HISTORY of the WORLD

全世界歴史家全書

自紀元前五千年到千九百四十四年
七千年間之大歴史
角谷素庵主筆全二十五冊
實價三百圓

ヘロドタス以後新らしくはギッボン、バツクル、マコーレー、ランケに到る最大歴史家の所著を編年的に集大成したる歴史界空前の大出版恐らくは又絶後ならん紀元前五千年より千九百〇四年目露開戦に到る上下七千有載の紀事細大なく洩らして餘蘊なし近古稀に見る一大偉觀也蓋し人間の適當なる研究は歴史にして歴史は常に過去の事實を知るに留まらず以て將來の人間及び社會の盛衰興隆を卜するの指南なり此故に凡そ國家及び社會の一員として住する以上は世界の歴史は即ち各一個人の利害休戚の關係する處なり政治宗教法律教育道德文藝等諸々心靈の問題を研究するものは先づ七千年來人間は如何なる事を成せしやを知らざるべからず而して國家興亡の分るゝ處社會人心の歸向する處を精査考證すれば其間自づから一貫の條理の統率するものあるを見るべし歴史は人生の眞理を語るの最大總辨なりとフリアマン教授の云へる眞に欺かざる不摩の言なる哉

「歴史家の世界歴史」学鑑広告

この四月十日を以てメ切ることにして、豪華なる内容見本を全国にばらまいた。

「本書は最も面白き物語本の一也／最も公平なる

歴史也／標準的参考書也／一大画譜也」

を四本柱の標語とし、見本ページ、見本挿画、全二十五卷（分冊にしたのは七十三卷）の解説、編纂者の氏名表、参照図表等からなる内容見本は、それを読むだけでも、興味をそそられるように工夫せられていた。

その付録の一枚図は新聞二頁大の紙面に古今東西の歴史から何百人かの人物をえらび、その肖像を累々とならべ、業績の大小によって絵柄にも大小の区別がつけられており、壁間にでも貼って眺めていると、云うべからざる興趣を誘起するものであった。

この筆者の生地は西国の山村で、六十数戸すべて農家である。その中の二人が「歴史家の世界歴史」のこの豪華な内容見本を受取っている。ひとりには十六歳の

少年だが、投書雑誌でそのアドレスを知られたらしい筆者自身で、も一人は町につとめていた銀行員である。また筆者の兄はそのころ京都府の小吏員であったが、それも任地でこれを受取った。してみると一家で兄弟ふたりに宛てられているので、これら特殊のケースを一般の基準とすることはできないが、どんなにその宣伝が、広汎にわたって、泳いでおれば雑魚をも網にひっかけるトロール船のような徹底ぶりであったことを、観察させる手がかりにはなる。しかも兄はよく居室の壁に、その世界中の歴史人物の顔を一堂に会せしめた一枚絵を貼っては、

「こうして見ていると実に愉快だ。せめて日本の部だけでもほしい」

とよく云っていた。日本の部は原典にないのを、東京支社で、有名な記者であり、英語学者であったブリンクリイ (Capt. F. Brinkley) に新たに執筆編纂を依頼したので、その一部は早稲田大学からエル大学に留学して、そこで望まれて教授となった朝河貫一博士が担当するというので有名であったから、広く一般に嗜読の念をそそったのだ。そしてこの募集の結果が千七百余人を獲得したとは、辞書類とちがう一科の専門叢書としては驚くべきことである。

四 モウパッサン全集

明治四十二年一月号の「学鑑」全一頁広告に“Lectures on the Industrial Revolution of the 18th Century in England. (Popular Addresses, Notes and Other Fragments) by the Late Arnold Toynbee, Together with A Short Memoir by B. Jowett”が全一頁を占め、七刷とあり、翌々月ふたたび半頁広告をして、「Held's Zwei Bücher zur Socialen Geschichte Englands」とならんで十八世紀英国産業革命を研究する両個の燈明台」

と云って、宣伝すこぶるつとめている。一九〇六年初版第七刷とあるからすでに数年前の著書だが、恐らく新たな時勢的要求によって増刷りせられたので、これがわが学界に珍重されだしたのはむしろ、第一次世界大戦をへて、日本にも社会科学が勃興してから、顧みてその研究に新たな照明が当てられたのであろう。

四月号に英訳モウパッサンの一頁広告が出ていて、十一巻の短編集(たいへん日本でもてはやされたアフター・ディナー・シリイズ)と、十七巻からなる Complete Works の到着を報じているのは、前にも出ているから必ずしも言及に値しないとしても、ここにいささか興味をひくのは書肆博文館は創業三十年を迎えた時(大正六年六月)祝意として、雑誌「生活」が記念特集をおこない「三十歳の私」なるアンケートを各界名士からつった。その中で正宗白鳥が

「まだ読売新聞記者をしてゐました。『何処へ』などを発表して私の作家としての位置が確立した年でしたが、そのために私の心に何等かの光明を与へられたといふことはありませんでした。今よりもむしろ身体も弱く心も暗かったくらいでした。しかしその年の秋はじめて下宿屋を出て家を持ちました。モウパッサンの全集を買って耽読したのもその年でした」

と答えている。明治十二年うまれの白鳥は、この四十二年をもって満三十歳である。当時は多く数え年がおこなわれたが、満をいうことも稀でなく、その数年間他に「学鑑」の広告でモウパッサン全集の入荷を報じているのが見当らぬかぎり(短編集は何回か入っている)白鳥はこの十七冊本の全集を買ったものと推察される。丸善の輸入書が如何に作家の成長に資したかを見るのに好例であろう。

そうかと思うと、中には、なぜこんな本が一頁広告を占めているのかと、後になれば首を傾けざるを得ないものもある。たとえばゲオルグ・ブランデスの「アナトール・フランス」は、現代第一の大批評家が当代第一の大作家アナトール・フランスを論評したのは「豈これ世界的な偉観にあらずや」と云うのはいいとして、僅々百三十頁にもみたぬ小冊が、モウパッサン全集と短編集をならべて広告したのと同じスペースを割かれている。おそらく、出版社の送りつけてくる宣伝材料の冊子によって、本物を見る暇もなく書くので、こうした不均衡のおこるのは当然であろう。

ただ後日になって考えると、魯庵のこの処置を弁護すべき彼ごのみの好事的材料が、この書中には見つかる。

ゲオルグ・ブランデスは、アナトール・フランスを論ずる中に一個所 Sadakichi Hartman の名をひきあいに出している。これは長崎うまれのドイツ人との混血児といわれ、アメリカに移住して、でたらめの「ホイットマンとの対話」を著作して、「草の葉」の詩人を苦笑させ、アプトン・シンクレアアの留守宅にあらりこんで彼をなやまし、フランスにわたってはヴェルレーヌ未亡人が陋巷に窮迫しているのを救うため、鉛筆を数ダース買ってきて、元軸をかねて齒痕をつけ、これ逝ける詩人が最後までつかった遺愛の鉛筆だと偽って、未亡人とともに売りさばいたと自ら語る。(木村毅著「日米文学交流史の研究」参照) 真偽は元より保証の限りでないが、このでたらめな男の名前が、ブランデスの耳に達していたのにおどろかされる。

いまひとつ、ブランデスは、アナトール・フランスの諸著作の背後に、ドレエフュース事件のような非人道性に向っては常に立ち上ってたたかう勇敢なる「人」をみると云って、フランスが東洋——支那にとる数々の暴挙を例

示し、東洋は決してそのような事はしないと云って

「東郷提督はその艦隊をひきいて、この国に襲来し、日本とフランスの貿易改善のためと称してブレスト港を爆撃したことはない。彼は高度の文化と徳性の名においてベルサイユ宮殿に火をかけたこともない。彼はまたルーブルの絵、エリゼエ宮の陶器を東京に略奪し去るようなまねも断じてしていない」

と述べて、この著作の時は日露戦争の最中で、日本の勝利により、黄禍説がドイツを震源地として起っている無稽さを痛撃して結論としている。魯庵がみたら拍案して痛快がったにちがいないのだ。

五 興味ある雑報

この年の「学鑑」は本欄の雑報に注目すべきことが例年より多い。

三月号は、この年がポー、グラッドストーン、リンカーン、ダーウィンなどの諸家の百年祭にあたるを報じている。同じ号にまたドイツの戯曲の老大家エルネスト・フォン・ヴィルデンブルッフの死去の記事がある。時勢おくれの観があったが、仮名手本忠臣蔵のドイツ訳 *Mitzuho-Gusa. Segenbringende Reisen. Nationalroman und Schilderungen aus Japan von F. A. Junker von Langege. 1880* を読んで敬服し、「むしろシェークスピアをしのぐ」と評したと留学中に直接の知交のあった藤代素人博士が語っている。（京都大学の史学講演集参照）六月号は西にありてはメレディス、東にありては長谷川辰之助（二葉亭四迷）の死を報じている。二葉亭の文学的に占める高き位置については今さらここに説くをもちいない。ただロシア語を専攻し、丸善はロシアの小説書の

移入が多くなかったので、関係が稀薄だったであろう。しかし国民英学会の講師兼高等科学生となって英書もよみ、現にダーウィンの「種の起源」など、若くから博識の魯庵が書名だけをきいて、形も見たことのない時に、すでに机上に開いていたということから、英書にもまるまる無縁でなく、それらは丸善を仲介として求めたであろう。いずれにしても二葉亭の死を報ずること、まことに淡々としているのは、私情で公器を乱用せぬ魯庵の用意で、外の場所では坪内逍遙との共編で「二葉亭四迷」という書物を編み、逍遙をして、あだかもジョンソンにおけるボスウエルの如しといわせている。

七月号にロシアのマルテンス博士 (Fëdor Fëdorovich Martens) の計を報じている。バルチック州バーナウにうまれた国際法の大家で、日露戦争の講和談判にウィット全権の随員としてポーツマスに活躍し、連敗の祖国をその汚名から救うた大手腕家である。「学鑑」は朝日新聞にのった有賀長雄博士の談を転載している。

それによると有賀博士は一八九七年のウィーンの万国赤十字会議に日本全権として列席して初めて相知り、ペテルスブルグとロンドンにおける両回の赤十字会議、ハーグの第一回平和会議など、国際会議に出席するたびに、出あわなかった事がない。セントペテルスブルグ往訪のおりはその私邸に招かれて、懇篤なる待遇をうけた。学統はオーストリアのシュタインに出てい



二葉亭四迷

る。シュタインは日本憲法作成の恩人で、明治天皇もその準備に、藤波言忠の筆記してきたシュタインの講義を勉強せられたから、云わば日本の憲法學說とは兄弟的地位にある學者であつたのだ。

六 読書家としての伊藤と大隈

この年もっとも一世を衝撃したのは、十一号の雑報に掲載せられている伊藤博文の死である。日露の交友を厚うするため、露都におもむく途中、ハルビン駅頭で、鮮人安重根に暗殺せられた。元來「学鐙」は、書物の雑誌だから、政治家軍人などの死は、いかなる名士の死でも、これを掲げないのが普通だが、この場合に限り「読書家としての伊藤公爵」と題して、特に例により「国民新聞」の「東京だより」(徳富蘇峰執筆)の全文を再録している。すこぶる奥深きものだから、ここに引用しよう。

「伊藤公は、所謂尋章摘句の學究には無之候得共、維新の大宰相として、好學讀書の人を求めば、恐らくは其上に出づるものなかる可く候。是れは公の勉強たるに止らず、復た其の遊興の一にて候。

公の愛読書の一は、論語也。曾て公の賓室たりし矢士錦山翁に聞く。公は嚴父十蔵翁の誨を奉じ、常住座臥、論語を離したることなしと。或は然らむ、記者は公が屢ば論語の文句を揮毫したるを見たり。

公の尊王心が、日本政記に負ふ所の多大なりしは、公が維新の際、長崎に於て、芳川伯に贈りたる、其愛蔵の日本政記の跋語によりても、之を知るに余りあり候。

然も公をして大経世家の識度を養はしめたるは、貞觀政要、宋名臣言行錄、及びカヴール伝に是れある可し

と被信候。

公は屢ば唐の太宗、及びカヴァールを口にしたり。是れ蓋し其の私淑する所ならむ。然も最も公を傾倒せしめたるは、小早川隆景に候。公は隆景の如何なる点を嘆美したる乎。所謂る隆景思案分別なる乎。其の思案分別の底に輝きたる誠意誠心なる乎。何れにしても斯人にて候。

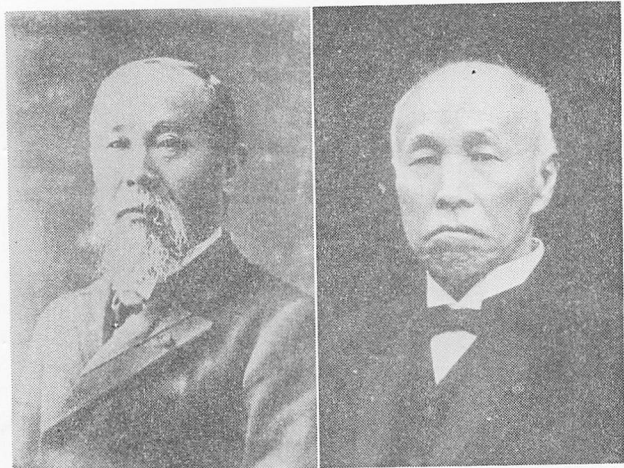
公の詩は、言志に専らにして、彫琢に意なかりしも、其の陶淵明を愛読したる感化は、期せずして、製作の上に現れ候。槐南詩宗嘗て曰く、公は多く詩を読まず、されど読む所のもの最善の作也。故に其の自から吟詠する所自然に高趣多しと。

外国の書籍に就ても、公の寓目を経たるもの、決して少小ならず。「タイムス」週報の如きは、尋常の茶飯と同様にて候。其他新刊雑誌、新刊書籍の類も、公の一瞥を与へたるもの、数ふるに遑あらず候。

記者をして最も驚かしめたるものは、公がトルストイの『復活』に就て、悉しく語られたる一事に候。公は三十五年歐洲より帰途、船中にて通読したりと被申候。

其他ナポレオン伝は、公の得意とする所にて候。曾て日米關係に就ての談話中公は起て彼理紀行の大冊を披らき、其の論証を与られ候、書卷は実に公の好友にして、斯る事は、よもや公は知らざる可しと思ふ事さへも、案外知識を有し候。

惟ふに公の読書は、学究の読書にあらずして、政治家の読書也。経世家の読書也、当今の大務を処理する人の読書也。所謂る読書甚だ解するを求めずとは、恐らくは公の読書に対する真諦たらむ。此点に就ては大政治



伊藤博文 (共同提供)

大隈重信

家にして、自から大学者た然としたる虞翁とは、聊か其趣を殊にし候。伊藤公は毫も学者臭く無之候。」

伊藤がロンドンから帰航した明治三十五年には、その正月早々乗船している。そして「復活」の英訳はその前年の年末おしつまってから刊行せられたのだから、これを読んだ者として、伊藤は最も早きに属する一人である。「復活」の邦訳者なる魯庵は蘇峰のこの文で知ったこの話がよっぽど気に入って、再三筆にのぼせている。伊藤が憲法制定の最好参考書としたハミルトンの著書は明治五年岩倉にしたがって外遊中、アメリカで求めたものであり、又彼は福地桜痴にギボンの「ローマ帝国衰亡史」をあたえ、その影響のもとに桜痴の有名な「幕府衰亡論」はできたというが、そのギボンも同じ外遊で求めたので、とくに丸善で彼が書物を求めたという事は伝わっていない。しかし英書をよむ力の達者なのをひそかに自負していた伊藤だから、丸善を介して取りよせた書物も多かったに違いない。

ついでを以て語っておけば、その伊藤の後継者で政治家中、その読書量において伊藤をしのぐ西園寺公望は、丸善の好顧客であった。若年のころ読破したユーゴーやゾラはフランス留学中の収獲だが、たとえば晩年におよんで

マルクス「資本論」仏訳の十冊本を三冊まで読了して、難解に辟易して、途中でなげ出した。それは丸善から取りよせたことは自ら語っている。伊藤に対峙して朝野の政界を両断した大隈重信もいささか外国語がよめ、若年によんだオランダ語の初歩理科書やナポレオン伝は幕末のことだから、丸善はまだ設立されていないが、中年以後毎年かかさず読んだ「ステーツマンス・イヤー・ブック」は、早稲田大学図書館に保存せられているものをみると、多くは丸善の商標が貼ってある。また彼は「リテラリー・ダイジェスト」というアメリカ雑誌を読んでいた。第一次世界大戦前の「タイムス」や「ニューズ・ウィーク」ともいうべき週刊誌で、隠然として読書界に勢力があったが、これも丸善を通して注文を発したものにちがいない。

前述、十二月十日、丸善仮営業所は近所の類火で全焼すると、とりあえず、新築中の建物に立ちのいた。まだ完成には遠かったが、中村日記に次の如くある。

十二月十四日 本店各商店（各部）ノ現在高ハ約十萬アリト

新築建物ノ一部引渡ヲ請求シ書籍部ハ表二階ニテ来十八日ヨリ営業ヲ開始スルニ決定ス社員事務所新築建物表三階ニ設ク

一月十八日（明治四十三年） 書籍部ハ予定ノ通り本日ヨリ新築建物表二階ニ於テ営業ヲ開始セリ